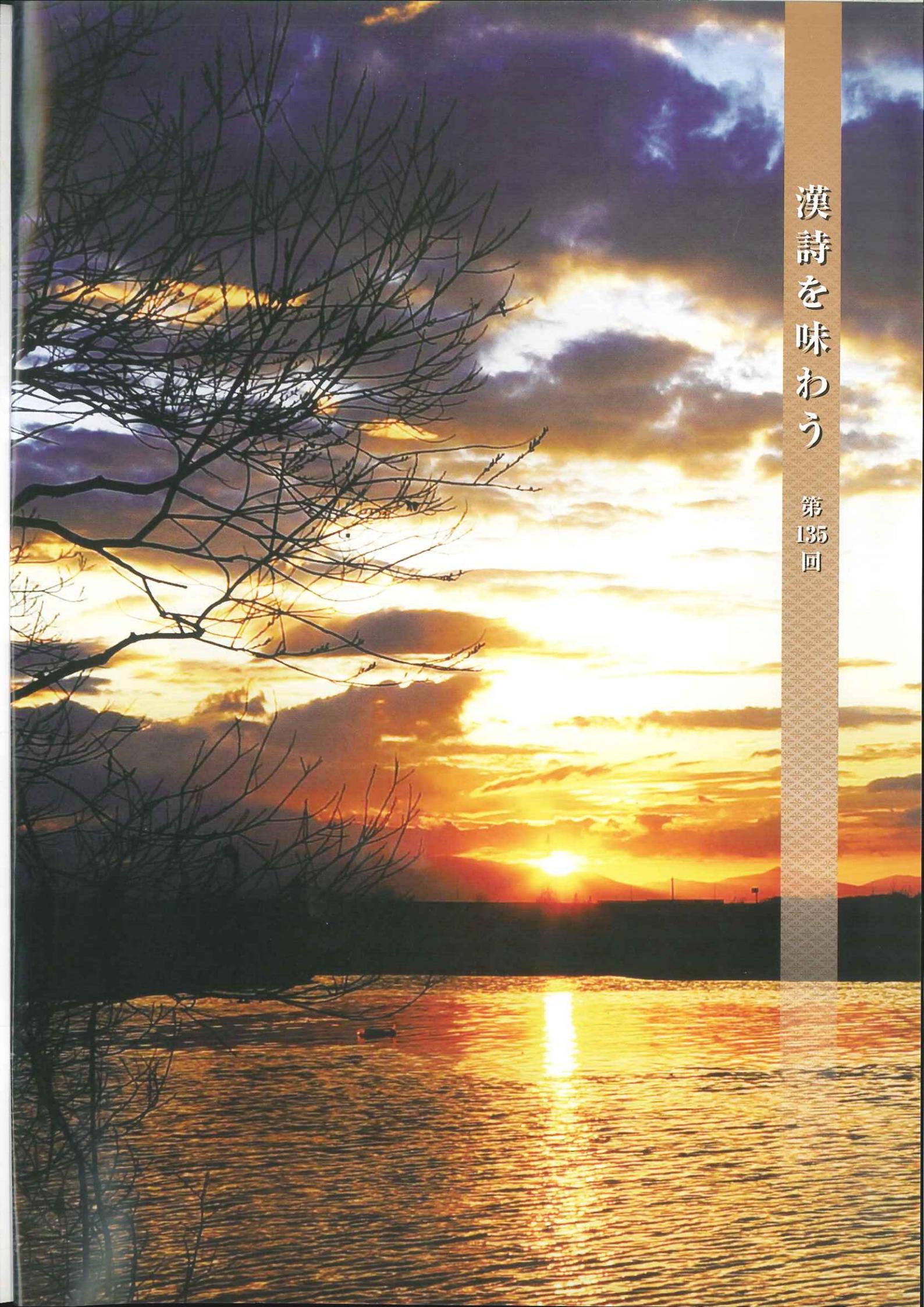


漢詩を味わう

第135回



しゃていのそくべつ
謝亭送別

許渾 きよこん

勞歌一曲解行舟

勞歌一曲 行舟を解く

紅葉青山水急流

紅葉 青山 水急流す

日暮酒醒人已遠

日暮 酒醒むれば 人已に遠く

満天風雨下西樓

満天の風雨 西樓より下る

送別の歌が一曲ながれ、旅ゆく舟はともづなを解いて出発する。

紅葉した樹々と青い山々の前を水は激しく流れる。

夕暮れとなり、別れの酒が醒めた時には友を乗せた舟はすでに遠く去り、見渡す空一面に吹く風と降る雨の中、私は西楼からおりた。

許渾（七九一～八五四？）は晚唐の詩人です。少年のころから病気がちで苦学して、四十一歳で進士に及第し、当塗県令、汾城県令、監察御史や睦州刺史などを歴任しました。詩は律詩に巧みで懷古詩・山水詩に名作を多く残しています。

謝亭は、宣城の山に囲まれて清らかな水が流れる地にあります。南齊の詩人謝朓が宣城の長官だった時に建てたことからこう呼ばれ、謝朓は友人だつた范雲を建てたばかりのこの亭で詩を作つて送別しました。李白の「謝公亭」にも「謝亭離別の処、風景毎に愁いを生ず。」とうたわれた送別の名所です。また李白は謝亭が建つ宣城を「秋登宣城謝朓北楼」の詩の冒頭で「江城画裏の如し」と称えています。

起承の二句で、色彩豊かな江南の秋景色のなか、友人を乗せた舟は急流に乗つてあつという間に遠ざかる様子をうたいます。そして転結句では数時間経過し、謝亭に残された詩人許渾、自分自身の姿を捉えています。友人を見送り酒も醒めたあと、辺り一面が風雨に包まれるなか許渾は楼を去つてきます。詩人の姿には寂寥感が漂い、孤愁の思いが色濃く感じられます。

前半の色鮮やかな青天の風光から、日暮れの風雨の景色へと転じ、二つの場面を対照させて、この変化に許渾自身の心の動きを反映させるという巧みな詩の構成です。この手法は許渾の得意とするところで、七言律詩「咸陽城東樓」の頷聯でも「溪雲初めに起きて日閣に沈み、山雨来らんと欲して風樓に満つ」と、美しい夕景の描写から風雨に晒される樓閣の状況を詠んでいます。いずれの詩も、單なる夕景の描写を超えて、晚唐の不穏な情勢や来るべき動乱の予感を示し、そこに唐王朝の末路を暗示していると解釈する説（三体詩素陰抄）もあります。

《謝亭》安徽宣城の北の郊外にあつた休憩所。謝公亭ともいわれる。

《勞歌》送別にうたう歌。

《解行舟》旅ゆく舟の纜（ともすな）を解く。

客心 落木に驚き 夜坐 秋風を聴く 朝日 容髪ようひんを見れば 生涯 鏡中に在り

落木驚夜坐秋風聴朝日容髪ようひん見れば生涯鏡中に在り

驚夜坐秋風聴朝日容髪ようひん見れば生涯鏡中に在り

『大意』旅人の心は落葉にも驚き、夜坐して秋風に耳を傾ける。朝の光にわが姿と髪の毛を見れば、生涯はそのまま鏡に映し出されている。(薛稷詩・朝に鏡を見る)

幽竹人の如く静かに 閑花我が為に香ばし

幽竹如人靜 閑花為我香

幽竹如人靜 閑花為我香

李太白詩

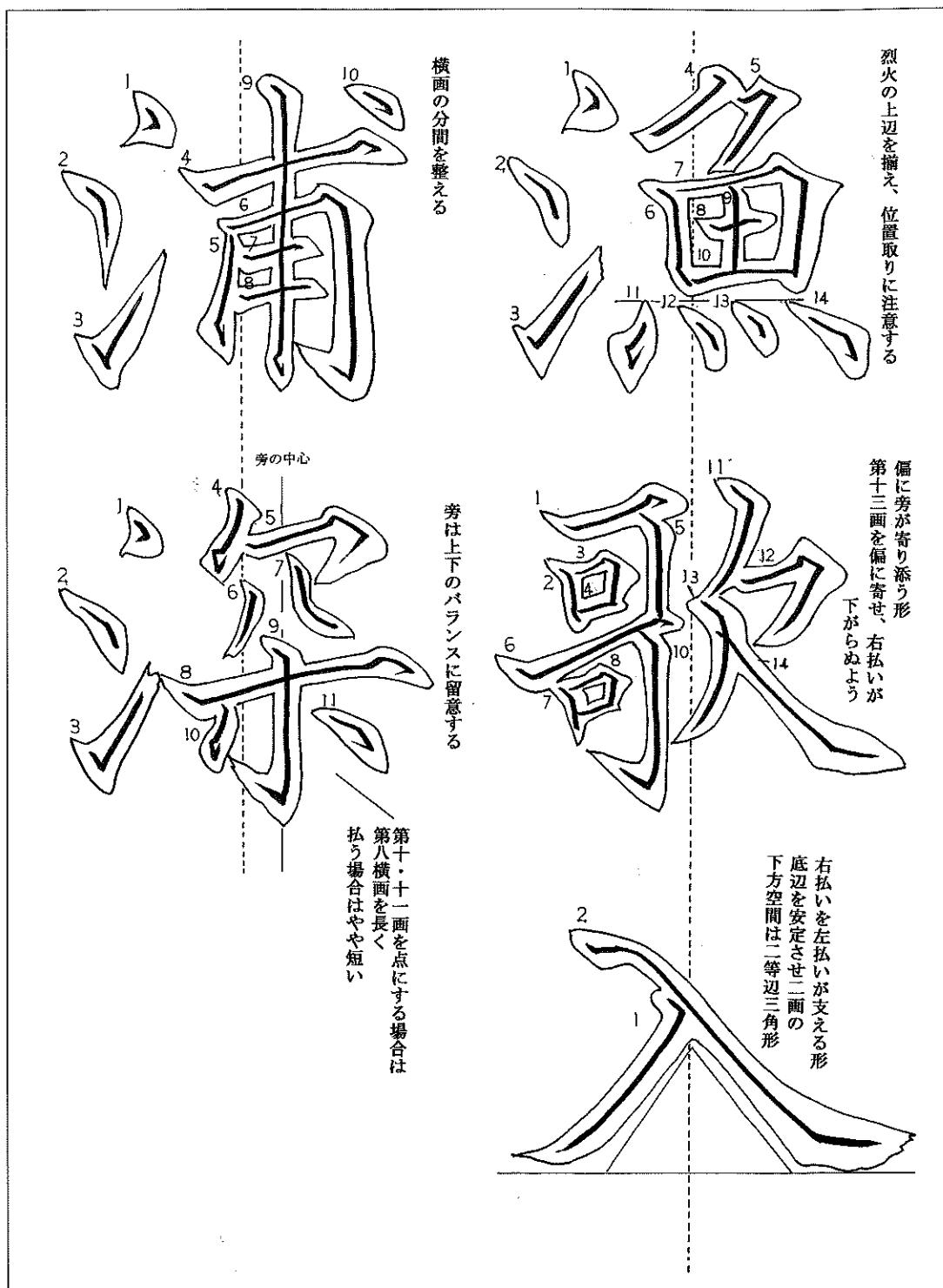
『大意』奥深い竹林はかの人とともに静かに、閑寂の地に咲く花は我が為に香る。(黎簡詩句)

読み
漁歌　浦に入つて深し（秋浦深く漁師の歌声が聞こえてくる）

浦 漁 歌 入

佐 藤 象 雲 書

一般部規定課題(解説)



一般部規定課題出品について

烈火の上辺を揃え、位置取りに注意する

偏に旁が寄り添う形
第十三画を偏に寄せ、右払いが
下がらぬよう

右払いを左払いが支える形
底辺を安定させ二画の
下方空間は二等辺三角形

規定課題は段級の区別なく、右掲
載の五字句となります。

初段以下の方に限り、前半二文字
または後半三文字でも構いません

規定課題(楷書)の出品はひとり
一点に限ります。

連月課題

王維詩「張少府に酬ゆ」

晩年惟好靜

老年惟靜を好み

萬事不關心

萬事心に関せず

自顧無長策

自ら顧みる長策無し

空知返舊林

空しく旧林に返るを知

松風吹解帶

松風解帶を吹き

山月照彈琴

山月彈琴を照らす

君問窮通理

君窮通の理を問う

漁歌入浦深

漁歌浦に入つて深し

草書

行書

浦深歌入

浦深歌入

次号課題

隸書

可積水不

浦深歌入

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品を出品ください。

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	
順 位	
氏 名	

萩が枝の露ためず吹く秋風に
とじか鳴り響き空城野の原

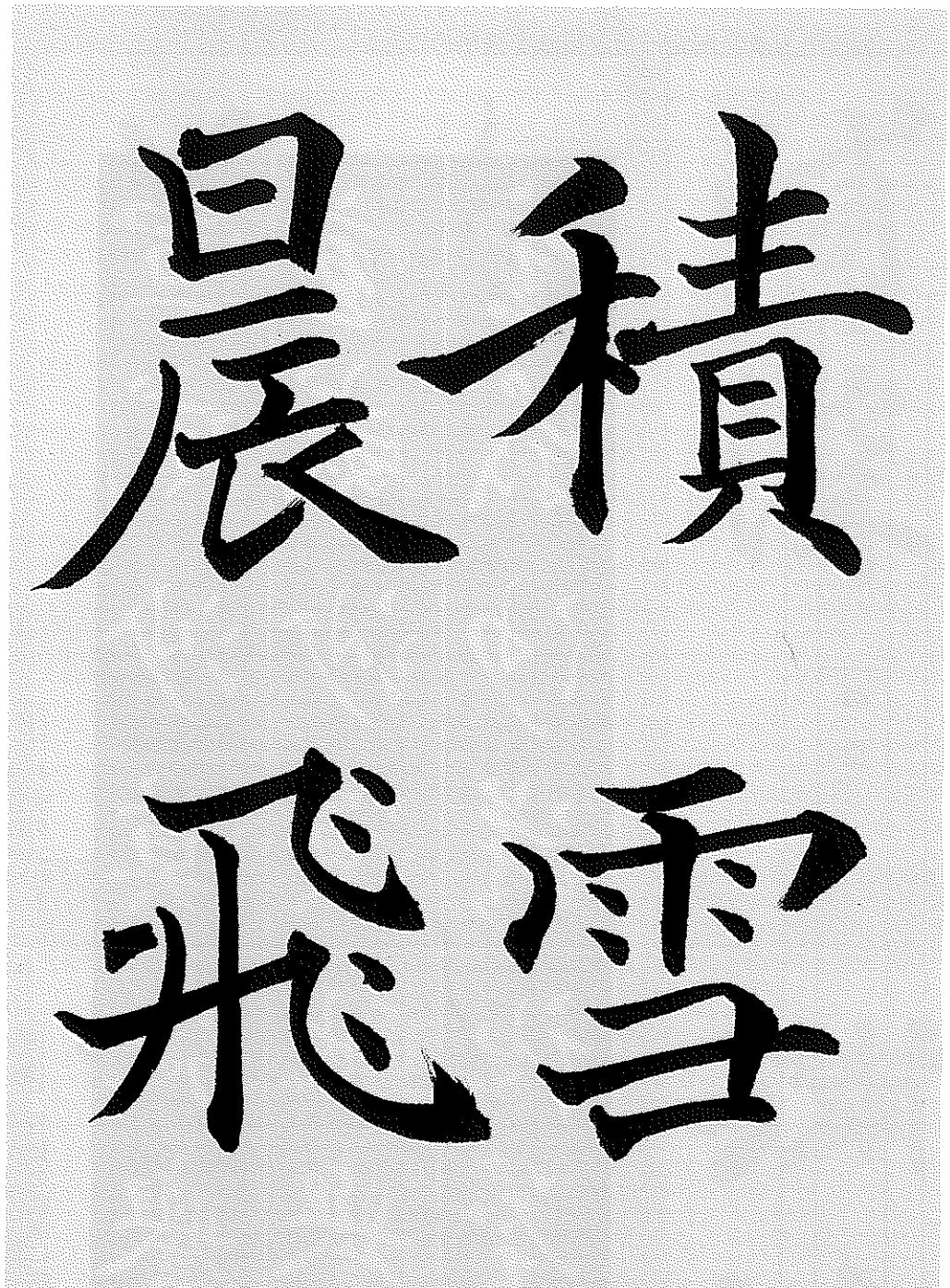
宣
威
沙
漠
馳
譽
丹
青
玄
威
沙
漠
馳
譽
丹
青
ゆ
洋
池
多
子
玄
威
沙
漠
馳
譽
丹
青

佐藤象雲書

音
セニイサバク
チヨタンセイ

略解

遂に天下を統一して威勢は僻地の砂漠まで及び
名譽を画像に描かれて後世に伝えられた

積雪
あした
に飛び…

象雲臨

「積雪晨飛」

褚遂良の書は古くから「青瑣婢娟」として羅綺に勝えずと称されています。宮中のあでやかで美しい美女のようで、美しい薄絹の衣装のようだという意味合いで。さらに「字裏に金を生じ、行間に玉を有す」とも言われ精緻な筆致が高く評価されています。

字体通用の変遷を考えると、甲骨は殷代のみで、金文、小篆は秦時代に亡び、隸書は前漢・後漢に限られます。行書・草書は書の世界で歴代にわたって使われていますが、通用書体としては、楷書のみが漢末から現代に至るまで依然として使われています。その中で、楷書の絶頂期といわれる初唐のなかでも、高く評価されている楷書がこの雁塔聖教序です。

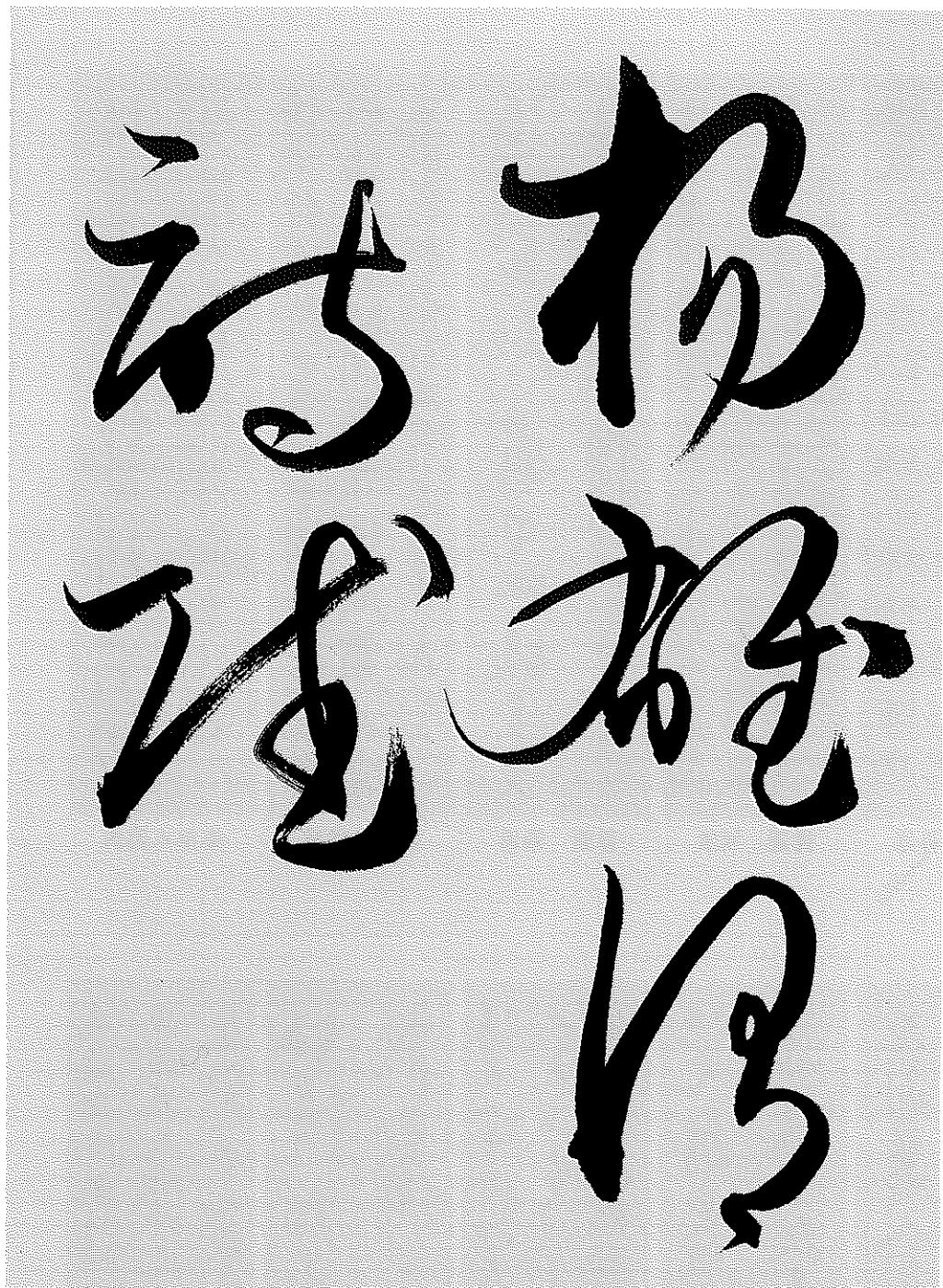
それだけにこの書法を理解して体得することは容易ではありませんが、根気強く習いこんで行くことが大切です。今月は「積雪晨飛」の四文字を臨書します。この暢びやかな風趣を捉えて下さい。



褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五二年)の臨書

(56)



楊雄謂えらく。詩賦は……。

象雲臨

〔楊雄謂詩賦〕

今月の五文字は、すべて偏旁からなる字です。偏旁はそれぞれ連绵線によつて結びついていますが、強弱と円直の変化があり様ではありません。

「楊」木偏から太く強い線で旁に繋げます。内部はつぶれないよう明るく。
 「雄」しなやかな細線で円転しています。
 空気を孕んだ風船のような曲線を捉えて下さい。

「謂」動きを抑えた穏やかでシンプルな結構です。旁の下部は小さめに收めます。

「詩」偏に対して旁をやや下げて、右に傾けます。

「賦」貝偏は横線から一度筆を打ち換えて斜めの線を書きます。旁は縦画を背勢にして前傾させます。



■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(37)